

丸山眞男 (まるやま・まさお) 1914～1996

日本政治思想史学者・政治学者 ～戦後の代表的知識人～

出生 1914年(大正3)3月22日、大阪府東成郡天王寺村(現・大阪市阿倍野区)にジャーナリスト丸山幹治の次男として生まれる。

履歴 東京帝国大学法学部政治学科卒業(1937)。同年同学部助手、助教授(1940)。2度の軍隊への召集。教授(1950)。戦後、青年文化会議、思想の科学研究会、憲法問題研究会等に参加し、民主主義運動の一翼を担う。1960年代以降ハーバード大学やオックスフォード大学等に招聘され滞在。1969年「東大闘争」の中で標的の1人となる。1971年東京大学法学部教授を辞職。

事績 戦前期に日本政治思想史の研究から出発し、新しい視角から成果をあげる。日本政治思想史以外の主要な研究テーマは、超国家主義=日本ファシズムの分析とその再来の防止 平和問題 民主主義の確立、等であったが、それらについて多くの論文を発表し、現実の問題とも関わり、大きな影響力を持った。またそれらの底流にある日本文化についても研究を進め、高い評価を得た。

評価 日本政治思想や日本ファシズム等の研究・分析において、方法の斬新さ、視野の広さ、成果の豊富さ、論述のあざやかさ等により高い評価を得ている。そのため大きな影響力を持ち、「丸山学派」と言われるグループも形成された。安保問題等を中心とする平和問題や民主主義の確立に対して深い学殖に基づく論を張り、時事問題にも関わった。「丸山ほどのビジョンと強固な意志を持った人物は大きな変化と混乱の時代にしか現れないだろうし、日本では明治維新以来ということになるのではないか。」(マリウス・B・ジャンセン/プリンストン大学)との評もある。丸山に対する批判は左右両派から数多くある。例えば丸山の啓蒙主義的理性や知識人中心主義に対する批判などである。

代表作

「超国家主義の論理と心理」 『世界』1946年5月号に掲載された。日本ファシズムとそこにおいて極限状況を示す大日本帝国の思想構造(天皇が精神的権威と政治的権力の両者を一身に集中していたため個人の自由等が認められなかった前近代性など)を究明するための、もっとも重要な試掘抗を掘り当てたもの(植手通有)との評価がある。当時の言論界をゆるがすと同時に、丸山をいちやく有名にした論文である。集第3巻に収録。

キーワード 永久革命 民主主義は理念と運動と制度との三位一体で構成される。そのうち理念と運動は永久に追求しつづける必要がある、という意味で主権在民を目指す民主主義は永久革命であると主張した。資本主義も社会主義も永久革命ではない。執拗低音 外来思想が日本に入ってきた場合にその変容を規定するもの(執拗に繰り返される、ものの考え方、感じ方についての日本的なパターン)をこのように表現した。無責任の体系 普通に使われている2つの単語を結びつけることにより、戦前の国家体制の特質を見事に表現した。

ポイント 丸山は2度兵隊に召集された。1回目は1944年7月から10月、2等兵として殴打等の虐待を受けるが、脚気のため召集解除。大学の法学部教員で召集されたのは丸山のみという。2回目は1945年3月から9月、この時広島で原子爆弾により被爆する。

最期 1996年(平成8)8月15日、肝臓がんのため東京女子医大付属病院で死去。享年82歳。



長坂勤氏撮影

Great Works 33

丸山眞男集 全17巻 岩波書店 1995～1997年 <081.6/124>

解題 本集は、著者の「自己の著作を「一括して社会の目にさらす」ことを通して知識人としての公的な責任を明らかにする」という考えに基づいて編集された。そのため、座談会での発言は除かれ、また、著者の言説をその時代的背景との関連において発展のあとをもたどれるように編年体での構成になった。収録されたものはほとんど論文である。

内容

第1巻 = 1936-1940 政治学に於ける国家の概念[1936年]近世儒教の発展における徂徠学の特質並びにその国学との関連[1940年 丸山のいわゆる助手論文 荻生徂徠は丸山が日本の思想家で尊敬する二人の内の一人 もう一人は福沢諭吉 徂徠の近代思想につながる積極性を明らかにする]他

第2巻 = 1941-1944 近世日本政治思想における「自然」と「作為」[1941年 徳川思想史研究の第2論文]福沢諭吉の儒教批判[1942年]神皇正統記に現われたる政治観[1942年]国民主義の「前期的」形成[1944年 丸山が

- 応召にあたり「遺書」のつもりで残していったもの]他
- 第3巻 = 1946-1948 近代的思惟[1946年]超国家主義の論理と心理[1946年]陸羯南[1947年]日本における自由意識の形成と特質[1947年]福沢諭吉の哲学[1947年]人間と政治[1948年]自由民権運動史[1948年]日本ファシズムの思想と運動[1948年]日本人の政治意識[1948年]他
- 第4巻 = 1949-1950 明治国家の思想[1949年 構造とその変遷を論述 視野は広く洞察力と分析は鋭いとの評あり]軍国支配者の精神形態[1949年 東京裁判の速記録を手がかりとしナチスと比較しながら日本支配層の精神と行動様式等を明らかにしようとした論文]ある自由主義者への手紙[1950年]他
- 第5巻 = 1950-1953 「三たび平和について」[1950年]戦後日本のナショナリズムの一般的考察[1951年]「現実」主義の陥穽[1952年]ファシズムの諸問題[1952年]他
- 第6巻 = 1953-1957 明治時代の思想[1953年]戦争責任論の盲点[1956年]「スターリン」批判における政治の論理[1956年]他
- 第7巻 = 1957-1958 E・ハーバート・ノーマンを悼む[1957年 丸山の国際的な交友関係を示すもので文章としての評価も高い]反動の概念[1957年 『岩波講座 現代思想 反動の思想』の「本巻の序論」]日本の思想[1957年 『岩波講座 現代思想 X 現代日本の思想』の巻頭論文] 他
- 第8巻 = 1959-1960 「である」ことと「する」こと[1959年]民主主義の歴史的背景[1959年]忠誠と反逆[1960年 『近代日本思想史講座6』(筑摩書房)に掲載]現代における態度決定[1960年]八・一五と五・一九 - 日本民主主義の歴史の意味 - [1960年]他
- 第9巻 = 1961-1968 幕末における視座の変革 - 佐久間象山の場合 - [1965年]憲法第九条をめぐる若干の考察[1965年]戦前における日本のヴェーバー研究[1965年]他
- 第10巻 = 1972-1978 歴史意識の「古層」[1972年 『日本の思想6 歴史思想集』(筑摩書房)の解説]近代日本の知識人 [1977年] 日本思想史における問答体の系譜 [1977年] 他
- 第11巻 = 1979-1981 映画とわたくし[1979年]闇齋学と闇齋学派[1980年 『日本思想大系31』(岩波書店)の解説]他
- 第12巻 = 1982-1987 原型・古層・執拗低音[1984年]政事の構造 - 政治意識の執拗低音 - [1985年]金龍館からパイロイトまで - オペラとわたくし - [1985年]他
- 第13巻 = 1986 「文明論之概略」を読む(一)[岩波書店]
- 第14巻 = 1986 「文明論之概略」を読む(二)[岩波書店]
- 第15巻 = 1988-1996
- 第16巻 = 雑纂 公表書簡 補遺他
- 別巻 続補遺 年譜 総目次 著作目録他

参考文献 ~この人をもっと知るために~

<図書>

- ☞ 丸山眞男論 主体的作為、ファシズム、市民社会(公共哲学叢書 2) / 小林正弥編
東京大学出版会 2003年 274p <311.21MM / 129> 資料番号 21572870
- ☞ 丸山眞男書簡集1 1940~1973
みすず書房 2003年 311p <289.1MM / 4364 / 1> 資料番号 21661897
- ☞ 福沢諭吉と丸山眞男 / 安川寿之輔著
高文研 2003年 480p <121.6MM / 183> 資料番号 21625595
- ☞ 丸山眞男 - 「近代主義」の射程 / 富田宏治著
関西学院大学出版会 2001年 245p <311.21MM / 131> 資料番号 21650676
- ☞ 丸山眞男とその時代 / 福田歓一著
岩波書店 2000年 62p <311.21 / 124> 資料番号 21322482
- ☞ 丸山眞男座談 第1冊~第9冊
岩波書店 1998年 9冊 <304GG / 685>
* 『丸山眞男集』を補うもの。丸山は座談の名手でもあった。
- ☞ 丸山眞男講義録 第1冊~第7冊
東京大学出版会 1998~2000年 7冊 <311.21GG / 117>
- ☞ 司馬遼太郎と丸山眞男 / 中島誠著
現代書館 1998年 238p <910.26GG / 1593> 資料番号 21017728
- ☞ 戦後日本の知識人: 丸山眞男とその時代 / 都築勉著
世識書房 1995年 552p <311.21EE / 115> 資料番号 20803300
- ☞ ヴェーバーと丸山政治学 / 滝村隆一著
勁草書房 1987年 253p <311.21U / 33> 資料番号 12392544

<図書(部分)>

- ☞ 丸山眞男論 / 吉本隆明著(吉本隆明全集撰第4巻)
大和書房 1987年 p203-281 <918.6U / 558 / 4> 資料番号 12740809